

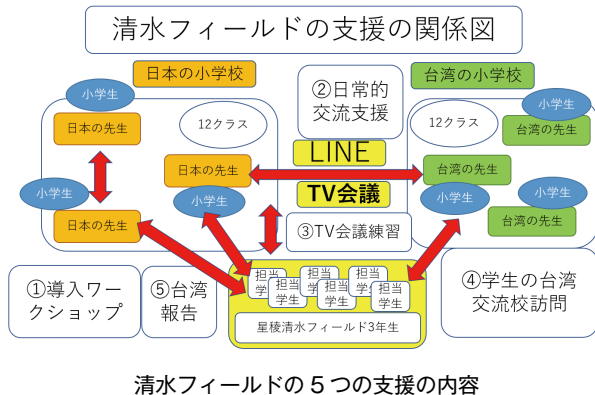
小学校国際交流支援プロジェクト ～小学校の国際交流支援「テディベアプロジェクト」～

団体名●清水フィールド3年／代表者名●清水和久(人間科学部こども学科・教授)

はじめに

小学校5、6年生では週2回の英語の授業が導入され、英語を学ぶ必然性を実感できる体験が求められている。またGIGAスクール構想により1人1台の端末が持てるようになり、表現の手段も容易になってきている。これらを有機的に結び付けるには、国際交流が有効であると考えられる。

清水ゼミでは、毎年、国際交流を希望する小学校を台湾の小学校に繋げ、クマのぬいぐるみを交換留学生に見立てた「テディベアプロジェクト」の支援を行っている。この活動の目的は、小学校現場の国際交流を後押しすること、そして何よりも学生自身はそのノウハウを学ぶことにある。この活動に清水フィールドの3年生が参加し、以下の5つの活動をおこなった。



以下5つの支援の内容項目と目標である。

- ①導入ワークショップ100人村の出前授業
目標：小学生に海外に興味を持ってもらうこと
- ②台湾と日本の先生のLINEでの交流支援
目標：先生同士の交流に参加し、潤滑油の役割
- ③小学生のTV会議支援
目標：台湾とのTV会議ができるように間接支援
- ④台湾の小学校への訪問
目標：日本の小学生の代理として現地を見てくる
- ⑤日本の小学校への台湾訪問報告
目標：台湾の交流校の様子をわかりやすく伝える

活動内容

今年度の参加校小学校は6校12クラス。

金沢市立大野町小(4年1クラス)、新神田小(4年2クラス)、四十万小(6年2クラス、南小立野小(6年3クラス)、野々市町立館野小(6年2クラス)、羽咋市立羽咋小(6年2クラス)。

各小学校に清水フィールドの6人学生が担当者として入り、5つの活動についての支援を行った。紙面の関係でここでは②④⑤の活動について述べる。

②台湾と日本の先生との意思疎通の支援

日本の先生も、台湾の先生も英語は外国語である。互いの意思疎通には英語が必要ではあるが、それにかける時間の制約もありハードルが少し高い。そこで台湾でも日本でも日常的なコミュニケーションの手段である翻訳機能が付いたLINEを使うこととした。学生は、片方の先生が書き込んだ内容については、すぐ反応を書き込んだりして円滑なコミュニケーションになるようにアシストした。

また、6月から毎月1回、日本の先生同士、筆者も踏まえてzoom上で、互いの進捗具合の情報交換を行った。以下が情報交換会の内容である。

表1 日本の先生の情報交換会

月	情報交換会の内容と話し合われた内
6月	キックオフ会 顔合わせと活動の見通し
8月	自己紹介の方法、交流の準備
10月	送られてきたベアとの活動について
11月	TV会議の段取り
12月	交流の課題と解決方法
2月	学生の台湾報告の内容紹介
2月	まとめ

この月1回の情報交換会で進捗状況がわかり、担当学生も他校の進捗を参考にして、交流の活性化の必要があるところは、てこ入れをすることができた。特に先に進んでいる学校の報告は特に参考になった。

③TV会議支援

一般にZoomなどを使ったTV会議はクラス体クラスで行われることが多いが、今回は3つの参加校が1つのクラスを6つの小グループに分けてTV会議を実施した。当然1人の先生では手が回らないので、6人の学生がそれぞれのZoomのブレイクアウトに入り、場合によっては司会を行い円滑に会議が進むように見守った。会議の成否が学生の腕にかかることになる。遠隔上でやり取りでは、「どちらが今発言の番なのか」「発言が終わったのか」「話の内容が聞き取れたのか」などをポイントに学生が確かめながらを見守った。

クラス対クラスの全対のTV会議よりも、小グループで行うTV会議は話す機会も多くなり、小学生の英語の自信につながったと思われる。

④台湾訪問

台湾が外国人の入国を認めたのが9月ごろで、12月に学生が台湾を訪問することが可能になった。学生は星稜大学のエリアスタジアドバンドという企画を利用し、12月24日から12月31日まで台湾の3都市を訪問した。訪問校は、台北市の五常小と日新小、嘉義市の精忠小と宣信小、高雄市の新甲小の5校である。日新小には、過去の交流校ということで訪問することができた。以下訪問した学生(R.K)の感想である。

「良かったことは、目的でもあった日本の小学校の児童へ台湾の文化など、現地の様子を伝えるための情報をたくさん入手できたことである。今後も日本の小学生に現地の様子を伝え、国際教育において、児童たちがより一層深い学びができるように支援していきたい。今回の研修で私が教師になったときに子どもたちに語ることが非常に増えた。特に台湾での英語教育は、英語だけを使って授業をしている点から、日本でもこのような英語教育が必要だと感じた。私が教師になっても、児童が外国に興味を持ってもらうように、英語に力を入れていきたいと思った。」

このように学生が、これまでの交流相手の学校を実際に訪れ、自分の目で見、相手の先生と話したことは極めて重要な経験になっている。

⑤日本の小学校への台湾訪問報告

帰国後、学生は1月中に日本の担当校へ出向き台湾訪問の報告を行った。学生が自らの視点でまとめプレゼンを行った。日本の子供たちは、台湾の小学校の給食では、食器は各自が持ってくること、お昼寝の時間があることなどに驚いていた。またVRゴーグルなどを授業に使っていることにも驚いていた。

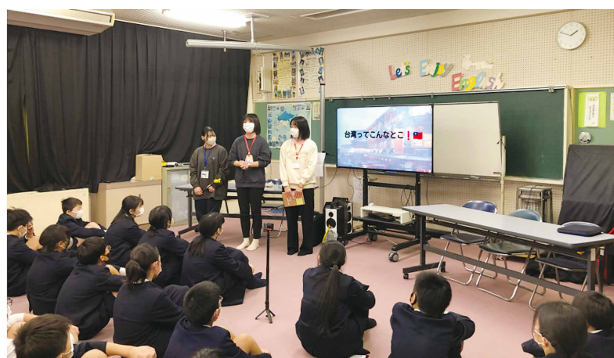


図2 大学生による台湾訪問報告会 in 四十万小

成果、結果の考察

1年をかけて小学校の壮大なテディベアプロジェクトを支援することができた。導入のワークショップに始まり、オンラインでの交流支援、TV会議、現地校への訪問、報告と1年間のストーリーを走り切った。大学生は小学校の国際交流のプロセスを1年間体験し、自分が教員になった時の国際交流のイメージを持てたのではないかと思う。また台湾は2030年度までにバイリンガル国家を目指しており小学校の英語の授業をたくさん見せていただいたことは、日本の小学校英語教育を考える上でも参考になった。

今後の課題、展望

今回の取り組みの中で、小グループでおこなう小学生の英語のZoom会議が大変おもしろく、今後の発展の可能を秘めていると考えるので、次年度は中心課題として取り組みたい。英語教育の進展とGIGAスクール構想の融合で、子どもたちの記憶に残る、ワクワクする国際交流を学生とともに目指したい。次年度もテディベアプロジェクトを柱として参加校を募り、台湾との交流を進めて行く予定である。